

編 集 後 記

手稲山頂が白化粧で装われた10月末日、意外な石狩平野の雪降りが、消えんとして消えさらず、そのまま居居った感じである。これは昨年とは1ヶ月の違いはあるが、同じ事情であると編集後記を書きながら、それを思い出している。5巻2号を遅ればせながら、会員皆様のお手元にお届けします。

本号は総説2編、原著4編、研修講座1編の内容となり、その原稿を寄せていただいた講座および先生方に心からの謝意を申し上げます。

総説局所麻酔薬アレルギーにおいて、歯科麻酔学の新家教授は、その異常反応が特異体質とか瞬目模糊であったものを、アレルギーという面から解説され、麻酔薬の抗原性を感知できる新しいRAST法を麻酔薬の構造にもとづいて案出された。それによる予防が期待される。口腔外科(Ⅱ)の村瀬教授はハイドロオキシアパタイトによる無菌顎顎堤形成について概説し、ハイドロオキシアパタイトの骨補綴は人工歯根のインプラントとともに、現在活発な老年歯学の研究領域にぞくし、今後期待するところが多い。

原著ではそれぞれ研究成果が発表され、その中から興味ある種々の研究課題が提示されて今後の進展を約束している。研究成果を祈るものである。歯科放射線の金子教授の研修講座の今回のテーマである線維性骨病変のX線診断では豊富な資料で解説され、また本態についていろいろと異論のあるところを要領よく纏められ、また連続して研修講座を引受けていただき厚くお礼を申し上げる。歯科保存学(Ⅱ)の松田教授に、オランダ・ハーグ市で開催された第64回国際歯学研究会に出席されたご経験について書いていただいた。なおこの内容は本歯学会講演会で報告された。

本歯学雑誌も本号で5巻を発行したことになるので、一つの区切りとして新しい心構えで取り組む意味合いを含めて、昭和57年12月創刊号第1巻1号から5巻2号までの総目次を掲載した。文献引用としても便宜となるであろう。海外交換雑誌は送ってあるが、その中で、ソ連のレニングラードのState Public Libraryからソ連誌Stomatologyと交換することとなった。次に交換雑誌ではないが、PhiladelphiaのBiosciences Information Centerからinternational libraryに本誌論文を紹介してもらうこととした。また米国のchemical abstract serviceに収載される話がでてくる。本歯学雑誌も揺籃時代を過ぎて、本誌に対する内外の評価を高める時期となっている。本誌の質、量をともに充実させなければならないと気を締めている次第である。

最後に第2雑誌ともいえる東日本デンタルトピックスの発刊に心から祝福の言葉を申し上げたい。日常、臨床に携わる歯科医に最新の情報や話題を提供するとともに、若い歯科医に経験などを伝える研修や、生涯教育の意味をもった雑誌であるとなっているので、本歯学雑誌とは相補完する関係にあるといえる。それぞれの特徴を発揮することによって、歯学会の発展が一層促進されるものと考えられる。東日本デンタルトピックスの心からの発展をお祈りする。

(T.O.生)